母を亡くして母を想う

高井法博
高井法博会計事務所
所長

母は昨年十二月三一日未明に九十一歳の生涯を閉じた。裕福な家に生まれ、僧職にある父と結婚し平穏な生活を送っていたが、戦後の農地解放で主力財産を失う等、社会や経済の変革期に上手く対応できず、そんな中で父は病に倒れた。生活保護を受けながら父を必死に支え、檀家の少ないお寺を守り、内職や近くの呉服店の仕立の外注を受けたり、猫の額ほどの土地とお寺の境内の土地を夜遅くまで耕した。その母の姿と月の光を見ながら『お母ちゃん、お腹が空いたよ、早く帰ろう。』と叫んでいた私達兄弟。その後、藁や農機具を積んだ荷車の上に、私達子供を載せて月を眺めながら帰ったこと。寺の軒下に金網を張り鶏を十羽程買い、採れた卵を一個だけ残し近くの八百屋に卸し現金収入に替え、残った一個を丼鉢に入れ、麦飯と醤油を差し混ぜ一家五人の茶碗に分けて食べた玉子御飯、また山羊も一匹飼い乳を搾り父や私達子供に飲ませてくれたこと、ドジでやることなすことが、なかなか思い通りにはならなかったが、とてもお人好しで正直で思いやりや優しさがあった。自分は食べなくても、着なくても、子供には食べさせ、着させてくれた。授業参観には、同級生のお母さんよりも着るものもみすぼらしく老けて見えたが必ず来てくれた。また、なけなしのお金で本や教材だけは、同級生の誰よりも与えてくれる、教育には熱心な両親だった。子供心に両親の無念さを思い、「今に見ておれ。俺が絶対に後ろ指をさされない思いをさせてやる。俺がどうにかしてあげないといけない。」と強く思った。社会に出てからも、郷里の病床の父や必死に子供の幸せを祈っている母のことを想うと、どんなに辛くても私には逃げるところがなかった。どんな苦しみにも耐えねばという執念が持てた。子供も自立し、これから楽しい人生をと思う矢先に父を亡くし、本人も交通事故に遭遇し、その後一度も退院することもないまま、長い闘病生活の末に逝ってしまった。苦労ばかりをかけ、親孝行をと思いつつ、やる気になればいくらでも出来たのに、仕事が忙しいと屁理屈ばかりをつけて見舞うことも少ないままこの現実を迎え、深い自責の念にかられている。勝手なもので苦しいとき、辛いとき、今でも都合よく一人車中で、寝床で、人のいないところで「お父ちゃん、お母ちゃん、助けてくれ。守ってくれ。」と心の中で助けを求めている。

今母は、亡き父と共に私の心の中に生き続けており、終生一緒に語り合いながら歩んで行きたいと想う。